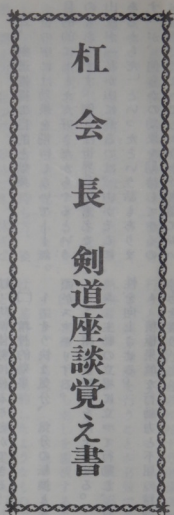


杠 会 長 剣道座談覚之書



杠先生の横顔 高橋生

杠先生は明治四十四年、佐賀に生る。佐賀中学、佐賀高等学校を了え、東京帝国大学法学部を卒業後満州国政府に勤務、後に行政管理局秘書課長、科学技術庁原子力局長等を歴任、退官後は理化学研究所理事、日本科学技術情報センター常務理事等を勤め、現在同郷の親友の経営する株式会社岩尾エンジニアリングの相談役のほか、科学技術庁参与、発明協会参



与として在職中。その間果鶏経済専門学校の、千葉商科大学講師として統計学を講ぜられたことがある。剣道に就いては佐

賀中学、高校在学中、恩田益藏教士、故大森勇次範士の教導を受けられ、在満時代には故古賀恒吉範士に師事され、戦後は別に故柳生厳長師範について柳生流を学ばれたという。

讀書を趣味とされ、東西古今に亘る万巻の書籍を蔵され、識見豊かに、時に談論風発、該博の知識を披露されては多くの人々に深かい感銘を与え、心を奮い起させる徳を備えられておられる。

現在横浜港南劍友会会長に推され日本の次代を負う青少年の心身の健全化を希求されその指導に當るかたわら、剣道の探求と剣道史の研究に打ち込んでいられる。趣味は読書、尺八（都山流大師範）著書に統計用語辞典統計行政な

がある。

この坐談集は風薫る五月、特に筆者が請うて先生の許を得てまとめたものである。

港南劍友会の剣道 指導方針について

一、現代剣道の意義

剣道は武道であつてスポーツではないとする考え方が一方剣道はスポーツであつてよいとする考え方もある。わが剣友会では折衷的な考え方をするのが適當であると考へる。すなわち現代剣道はスポーツではあるが、西洋流のスポーツ一般と異り日本古来の武道の伝統の上に立つた特異のスポーツであるという見方をとります。普通スポーツが一定のルールの上に成り立っているのに対し、武道には勝敗をきめるルールがなくどちらかが斗志を失うか、斗争力を失うか——終局的には死——かによつておのずから勝敗がきまる点に著しい相違があります。ただ時代の變遷とともに審判者を立てて勝敗を争うようになり、簡単なルールが設けられるようになって来ました。例えば打突の部位を制限することに加えて最近では時間の制限、試合場所の限定をする

など多分にスポーツの要素がとり入れられるに至っています。したがって、ややもすれば剣道が武道の伝統たる特質を失い勝ちてありますが、そうならないのは剣道でなく竹刀競技といわざるを得ません。戦後の境(しな)い競技が日本人にとつて如何に魅力のないものであったことか、に思い至れば足りると思います。

この一刀に生死をかけるまた肉をきらして骨を断つというような気はくこのこもつた打突を行うのでなければ、剣道を修練しているとはいえないと思います。

、とはいっても武の意味が本来「ほこを止める」という点にかんがみ破邪顕正自他防衛のためのものであることを忘れてはなりません。やくざ剣法、なぐり台い剣法は排斥されねばなりません。

二、剣道修得の目的と効果

世の中には効果を期待しないで——無目的に——ただ好きだからやるというものもあります。例えば世界的に著名な登山家が「私が山に登るのは、山がそこにあるからだ」といったという話もあります。が、何らかの効果を期待してやるのが普通ではないでしょうか。剣道において通常挙げられる効果は次のようなもの

です。(文部省の学校剣道指導の手びきを参考にしました。)

(一) 身体的効果

1. せき柱を伸ばし、常に正しい姿勢を育成する習慣を身につける。

2. 循環、呼吸、消化、排泄などの内臓諸器官や感覚器の機能を向上させる。

3. 筋肉の伸縮性、関節の可動性を高め、瞬間的な筋力、持久力を発達させ、筋神経の協応を促進させ、正確、機敏、器用、リズムの能力を向上し、ねばり強い身体をつくる。

4. 打つ、かわす、とぶ等対人的対応動作によつて基礎的運動能力を発達させる。

5. 相手の動きを冷静、正確に判断し、よくこれに対応し、敏速に決断敢行する反射神経を向上させ、瞬間的に危害を避け、防衛体勢に移ることが出来る。

(二) 精神的効果

1. その快な気分、気分の転換となり頭がスッキリする。

2. 情緒の安定性を向上させる。

3. 主動の立場に立つて行動し、自主性を向上させる。

4. 積極果敢な行動力と不屈の精神、斗志を養う。

5. 真面目、謙譲、忍耐力を育成する。

6. 緊急事態に対処して沈着公正適確な判断力を体得する。

三、指導方針

(一) 礼儀を重んじ、折目正しい行動をとらせること。

剣道は礼に始まり礼に終るものとされて、道場には正面に神棚を設け、九けみかづら、ふつ主の両武神を祭つてあります。道場の人出には正面(神棚があるものとして)に礼をすること。また、上座には師範並びにこれに準ずる者のみが着座する。ただし、元立ち等必要な場合には師範の指示によつて上座に立つことが出来る。師範、先輩等には道場では勿論道場外でも挨拶をすること。稽古の始めには号令者を定め、一同正坐の上「気ツツク」(或は「姿勢ヲ正シテ」)「静座」「静座ヤメ」「先生ニ対シ礼」の号令で一斉に「オ願イシマス」と言つて礼をし、その後「オ互ニ礼」と再度礼をする。稽古の終りにも同様の礼をする。「オ願イシマス」のところは「有リガトウゴザイマシタ」という。また、立合の場合にも「オ願イシマス」といつて始め、「有リガトウゴザイマシタ」で終ること。

道場内では静しくにすることは勿論

竹刀、防具等をまたいだり、足げにしたり、投げ出したりしてはならない。

(二) 基本動作、基本業の修得を徹底させること。

基本動作、基本業は応用動作、応用業の基礎となるべきものとして剣道各流派の中から精選されたものであってこれを十分に体得しなければ上達は覚つかない。したがって基本動作(竹刀の持ち方、姿勢、構え方、目つけ、足さばき、体さばき、打ち込み方)が十分できるようにしてからでないといふと防具の着用を許さないことにする。

(三) 竹刀の重さ、長さを各人の体格に合ったものにする。

全日本剣道連盟では竹刀の重さ、長さについて中学校以上については定めていゝるが、幼少年については定めていない。身体の発育が未だ十分でない幼少年が体格、筋力に不相応な重い竹刀とか長い竹刀を用いることは基本動作の修得にさまたげとなるばかりでなく発育にも害を及ぼすおそれがある。のみならず相手に損傷を与えるおそれなしとしない。したがって経験豊富な師範の指導によって適宜なものを使用させるようにする。

(四) 準備運動と終末運動(整理運動)とを励行すること。

剣道ははげしい運動が要求されるので稽古あるいは試合前には十分準備運動を行うとともに終了後においても調息を主とした終末運動を行うことが必要である。熱練者においてさえアヤレノ足を切るなどのことがある。

(五) 素振り、打ち返しを重視すること。

素振り、打ち返し(打ち込み切り返し)は、基本動作を集約したよいものであると同時に打ち込み十徳、受け太刀八徳(会報二号参照)といわれるほどの効果があるものである。悪いくせがおのずからなるとともに上達を早めることとなる。昔から打ち返しだけを一年間続けると初段の腕前になるといわれるぐらいである。稽古の後には必ず行わさせられたものである。素振りは勿論打ち返しも一人だけでも実行できる剣道のすぐれた練習法である。

(六) 合理的な稽古法に着眼し、勝敗にこだわらないこと。

昔から稽古は数かけてやれとか打たれ稽古せよとかいわれている。体験に基づき至言であるが、順序立つた剣理になつた稽古を重ねるのでなければ、たつき合ひのいわゆるやくざ剣法になつてしまつて上達しなくなる。よしんば勝つたとしても偶然的に勝に過ぎない。理にか

つた勝をおさめるようにならなければ、真の勝とはいえない。いかなる場合にも誰と立合つても不敗であり得るかという課題の解決に剣の先達たちがいかに苦心したことか。剣道史をひもどけばしゆく然とさせられるものがある。偶然を期待しては剣をとつての生死の関頭には立てないと思う。したがって勝敗などどうでもよいというのではなくこだわるなというのである。また無理な稽古はけがのもともなるばかりでなく無理がたつた健康をそこねることにのみなりかねない。

(七) 危害予防に留意し、楽しい剣道ができるように工夫すること。

竹刀の破損、防具装着の不完全などから思わぬけがをすることがある。また昔は体当り、足がらみ、組み打ちなども鍛錬の手段として認められたが、今日では打ち込みにもなり体当りの程かは禁止されている。突き業についても幼少年の間では禁止となつていゝ。そのわけは、いずれも危険であるばかりでなく、すなわちおな、のびのびとした業の修得にさまたげとなるからである。また、相手かまわない強打もさけたいものである。初心者同志の稽古においても力にまかせて打ちこえるいわゆる新鋭剣術は上達のさまたげとなるから改めさせなければならぬ。

練達者の打ちが強くてもそれは手の内のしまりと気剣体の一致によるもので新割とは異質のものである。幼少年は心神の発育が不十分であるから、強打は精神をいしゆくさせるばかりでなく発育に障害を与えるおそれがあることを考慮しなければならぬ。

以上のほか保健衛生にも十分注意して剣道を楽しむ環境を作り上げることが大切である。勿論鍛練である以上きびしさを忘れてはならないし、慢心を戒しめることを怠ってはならない。

以上

葉隠と剣道

葉隠は佐賀鍋島藩の武士道を説いたもので「武士道」といは死ぬことと見つけたり」とか四賢願「武士道においてかくれ取り申すまじき事。主君のご用に立つべき事。親に孝行仕るべき事。大慈悲を起こし人のためになるべき事」といふのが骨子であります。著述者山本神右衛門常朝の叔父村川伝右衛門は柳生宗矩の門人で鍋島支藩小坂藩の藩祖元茂の家老職であり、元茂は宗矩から門外不出の「兵法家伝書」三巻を伝授されたほどの新陰流の名人でありました。そういう因縁で葉隠には剣道の話が取りあげられています。

その一。ある剣士が老人になってからいいうは、修業というものは、一生を通じてみる、いつかの段階がある。下の段階では修行しても一向に物にならず、自分も下手と思ひ、人もそのように思ひ、この有様ではお上の役に立たない。中の段階になると、まだまだ役には立たないが、自分の足りない所がわかり、人の足りない所もわかるようになる。さて、上の段階になると剣術が自分のものになり、人にも自慢できるし、人に「うまくなつたなあ」などと、ほめられるとうれしくなり、人の未熟ぶりを批評したりする。この段階になると一応お上の用に立つ。もう一つの段階になると、何も知らないふりをするようになる。そうすると、人も上手だと認めてくれる。大体これまでで止まりであるが、この上に一段とすぐれた段階がある。ここまで進んでも、いかに剣の道が果てしなく遠く遙かなるものであるかということが、わかつてくるから、もうこれでよいと思うことはなくなり、いろいろと自分の足りない所がわかつてきて、死ぬまで、これと一切をなし終えたなどとは考えなくなる。そうすると、もはや自慢したり卑下したりなどする気持も消えてしまふ。柳生宗矩殿も「人に勝つ道は知らず、我に勝つ道を知りたい」と言われたそうである。昨日よりは上手になり、今日よりは上手になって、一生日々仕上げることである。これも果ては無いというこである。

その二。柳生宗矩殿の教えの中に、「道で牛に出あったとき、こわがる気色のある人は、武士として見るらしいことである。牛が人を突くときには、ふだんの形のままで突きかかゝるものではない。まず、ちゃんと角(つの)構をしてから突くものである。そのように心得ておれば、たゞい脇を通つても恐れることはない」といつている。武士たるものは、このようにまで嗜(たし)を、まねばならない。(註)これは、柳生新陰流の兵法でいうには、付(めつけ)のことである。同流の目付には、二星(にせい)嶺谷(みねたに) 連山(と)おやまきがある。二星は西の拳、嶺谷は右の杖、連山は全身。相手が攻めようとする時にはその気持が、まずこれらの部分の変化としてあらわれてくる。柳生流では相手のこの部分を油断なく見て対応することが大切であるとされている。牛の場合は、突くという気持が角がまえとなるわけである。したがって角構がなければ突くことはいできないから、いたすらにこわがることはないわけである。

鍋島藩では二代目の勝茂と子の元茂が柳生に教をうけ、鹿島藩祖直朝(現、参議院議員鍋島直昭氏の先祖)も宗矩の弟子という風に柳生流に傾倒していて世間では「鍋島新陰流」とさえいわれていました。私の先生の故大麻勇次範士も新陰流を称しておられました。(以上)

劍道流名考

(5)

劍道史をひもとけば江戸時代には五百流をこえる流派があつたことである。(武芸流派辞典には馬術、軍法を含めて五千流を取載している。)現代では流派の伝統をほぼそのままの形で護持しているものを総称して古流といつて現代劍道と區別しているが、その数は五、六十に止まり、学習者も極めて少数であろうと推定される。かつて大流派であつたものが必ずしも生き残つていない。後継者が絶えたなどいろいろの事情によつて劍道史に流名のみを止める結果に終つてゐるのは、劍道が体術であり実践であることから、また、古流が秘伝を重んじ、時には、わざとわかりにくい文字をつかうとか抽象的に形の名称だけを示してその説明は口伝によるとして今日の劍道書に見られるような詳細な説明がなされてゐないし、写真術もなかつたことなどからやむを得ないことであろう。劍道のスポーツ化に反発する人々により古流の復活を唱える動きもあるが、大部分のものについては復元が困難であろう。

この流名考の由来をとりあげようとするのは、おおよそ次の三つの理由によるものである。

その一つは、劍道を学んでいるという者の多くが、競技としての劍道すなわち試合に勝つための劍道の修得のみを目的としてゐるようになり見つけられるし、競技用の劍道の各種の技は今日まことによく整備されてゐて、その技を(あるいは得意技としてその一部を)どの程度に身につけてゐるかが段位の上下を決定してゐるかの観がある。劍術というとき古くさく下等のように思ひ、劍道というとき高尚のようになつてゐるが、右のような状態であつて道の名のることが適當であるかどうか。よく考へてみてもらいたいと思ふ。

(劍「道」の反省)

その二つは、劍道が一般スポーツと異つてわれわれの先祖が長い間苦心に苦心を重ねて発明改良を加へ今日完成した形にもつて来たものであつて、いわゆる技術導入のように外国で完成したものをまねしてゐるのではないことはいふまでもないことながら示例からその認識を深めてもらいたいこと。(伝統の認識)熟達者でさえ劍道通史に暗く、下位者にあつては常識的な流名さえ誤読するといふ醜態を往々にして見聞する(例えば直心影流をちよく心影流といふような)ことである。(字劍者の常識)

以上の観点に立つて劍道史上特立する流派の名称の由来をたずねてみることにする。先ず劍道の発達過程を展望し、その中で見のがしてならぬ流派あるいは特異の流派を年代を追つて記述する。

石器あるいは木竹を武器としていた古代には術といふほどのものはなかつた。銅、鉄の製法を知るようになつてから矛や劍が作られるようになり、それらの極めて簡単な操作法が芽を出しかつたであらうことは、古書に「ほこゆげ」(矛で突くこと)、「たちかぎ」(太刀で打つこと)などの語があることからも知られる。神代の頃武人として傑出してゐたのは武甕槌命と経津主命であつたであらうことも前者が鹿島神宮の祭神として後者が香取神宮の祭神としていづれも今日に至るまで武神とあがめられてゐることから推察される。ただその時代には劍法と名づけられるほどのものはなかつたやうで、それよりずっと降つて源平時代に至つて武士団が勢力を振るうようになつて戦場の勇士が武芸の達人となつて来たものよりである。そのよい例は、鞍馬の僧正が谷で劍術の修業をし九牛若丸(義経)が京の五条の橋で僧兵の弁慶(大力)にまかせて敵を当るを幸いになき倒すだけ)

のなきなたと試合をして打ち負かした話に見ることができ。織経流あるいは鞍馬流と呼ばれ京八流の源流の一となつてゐる。その頃関東においては鹿島神宮や香取神宮の神宮達の間は剣道の達者な者があられ、その門系から足利時代中期に飯篠(いゝささ)長威齋家直が天真正伝神道流を、松本備前守尚勝が鹿島神道流を、鎌倉の念阿弥慈音が念流を名のり関東七流の源流となつた。また、九州においては日向(宮崎県)に愛州(あゐす)移香齋惟孝が陰流を発明し、新陰流の源流をなした。以上の四大流から後世の亜流が派生し五百流にも及ぶ盛大さに発展したものと考えられる。以下に主な各流派について流名の由来を考察することとする。

○天真正伝神道流(てんしんしょうてんしんとうりう)

長威齋が香取神宮(千葉県内)に参籠して刀法の工夫をしている時に天真正(かつぱ、河童)があらわれて秘奥を伝授したので、天真正の伝授による神の道の流(剣の体系、系統)という意味で名づけられたといふが、これがであろうか。この亜流である天真正自顕(じげん)流と称するものもあるが、天真(香取祭神)の正伝の神道と解するものが正しいのではあるまいか。

河童を天真正という例を知らない。家直はもとも槍の達人で後に剣の名人となつた人で剣道中興の祖といわれている。この流は別名天真正とか天真正伝とか神道流とか香取神道流ともいう。

○鹿島神流(かしましんりう)

鹿島神宮神官の家系の松本尚勝が神伝を得て鹿島伝来の刀法を大成して名づけられたものである。この流から塚原卜伝の新当(しんとう)流が派生している。新当は神道の借字ではないかと考えられるが、卜伝(ぼくてん)が鹿島中古流を父に習ひ、後に心を新たにして敵に当れという神託を得て名づけられたといふ説もある。俗に卜伝流あるいは無手勝流などという。宮本武蔵が十三才で初勝負にのぞみ新当流の有馬喜兵衛に勝つたと五輪書に自記している。

○念流(ねんりう)

鎌倉寿福寺(地福寺との説もある)の僧で鞍馬で異人に会つて刀術を発明して奥山念流と称し、十六才の時鎌倉の神僧から秘伝を受け、鎌倉念流と称したといふ説、また、晩年信州波合村に住んで念大和尚と称したことから念流といふとの説もある。念流の伝書に念の字は識と同じことである。赤い白いも何度見ても一寸見た時の初一念を識といつて分別の出ぬ前である。らも類推される。この流は愛州陰流とも

この初一念を太刀先にこめて敵に肉連し余念をいれぬ。次に気を機といつとして気合いとタイミングの大事と一心不乱を強調していることに由来するものと考えられる。慈音の高弟に樋口太郎兼重なる者があり、その七代目の又七郎定次が馬庭(まにわ、郡馬県内)において念流の興の主といわれ世人稱して馬庭念流あるいは樋口念流といひ現代に及んでいる。馬庭念流秘術中の一つ矢留めの術を見ることがあるが、これこそ一念、気合、タイミングが一体とならなければ、射抜かれてしまふであろう。

○陰流(かげりう)

陰流とは、古くからある日本剣術の名称で、陰とは陰密の意味で秘術を表現したものとす。陰は陽に対するもので陰の太刀(例えは八相の構え)を中心に組み立てた刀法であるから陰流と称したのではなからうか。この流の系統の柳生流において敵が打ち込んで来るのを八相に取り上げて袈裟切りにする業が多いこと、すり上げて後の先の勝を尊重していることからも類推される。この流は愛州陰流とも

いい新陰流を派生し、後に柳生新陰流が一刀流と並んで徳川將軍家のお家流となりに至って剣道の名流となった。

○新陰流

戦国末期武田信玄、豊臣秀吉の頃に大胡

(おおご郡馬県内)の城主の家に生れた上泉(かみいずみ)信綱が鹿島神流と愛州陰流を学んで二流の精神を合わせて新陰流と称した。初め神陰流を称し後に新陰流と改名したともいう。信綱は高弟を連れて各地を歩き流儀の普及をはかった。奈良で柳生石舟齋宗厳が試合に負けつ弟子となり、柳生新陰流(後世に柳生流ともいう)を名のるようになったのは兩人にとつて合縁奇縁であつたらう。宗厳の五男但馬守宗矩が秀忠、家光二代にわたる兵法師範となり、長男新次郎殿勝の次男兵庫助利敵が尾張(名古屋)徳川家の師範となつて天下に盛名をうたわれるに至つた。柳生両家とも上泉を流祖と仰いでいる。上泉のえらさは、時代が戦乱に明け暮れる戦国の世であり、自身戰場経験豊富な勇士の士でありながら、袋竹刀を發明して活人剣を流の眼目とし、介者(鎧武者)剣術に改良を加えて素肌(鎧を着けな)い)剣術のはじまりをなし、現代剣道への道を開拓したことにあつた。しかも高嶽をもつて召しかかえようとする

武田信玄その他の権勢家の誘いを断つて剣法の普及に終始した高尚な志には全く頭がさがする思いを禁じ得ない。近世剣道の祖といつても過言ではあるまいと思う。

○一刀流

上泉より少し時代が降つて伊豆に伊藤一刀齋景久という名人があらわれ中泉流の分派として一刀流を稱するに至つた。一刀流とは一刀齋を流祖とするから名づけられたのではなく、一刀は万刀に変化する。万刀は一刀におさまるといふ流儀の主旨を表現したものである。この流の伝書に、我の一をもつて敵の二に應ずるに、打つて受け、はずして斬るときは、利はあるが受けてから打ち、はずしてから斬るのでは一に對して一。二に對して二をもつて應ずるので、勝負は彼我に係つてしまふ。一をもつて二に應ずるときは、必ず勝ちが、一をもつて一に應ずれば、或は勝ち或は負け。一をもつて二と求めてこちらより向えば必ず負けると教えている。新陰流の「後の先」を主とするのに対し「先の先」を主とする剣法といえようか。新陰流にすり上げわざが多いのに対し「切り落としわざ」が多いのにも両流の対照的な特色が見られるようである。一刀齋の高弟小野次郎右衛門忠明は柳生と並んで將軍の師範となり流名を高めた。こ

の流は小野派、伊藤派、梶派、中西派と分れたが、小野派中西派から北辰一刀流と無刀流が生まれた。前者は千葉周作が、お家流の北辰無双流と師の一刀流とを合わせて一流を編み出したものである。北辰とは北斗星のことで北斗星が衆星を統率しているようにありたいと北辰を神として祭り、その靈感にあずかつて北辰の双へならぶもの、無き流を創出したという意味であろう。千葉はわざの完成と修業法の合理化を行つた第一人者で現代剣道にうけつがれている。後者は山岡鉄舟の創意になるもので、自ら流名の趣意を解説している。すなわち無刀流と稱するのは、心外に刀無きを無刀という。無刀とは無心というがごとし。無心とは心を止めずといふことである。心をとどめれば敵あり、心を止めなければ敵無しと。山岡は一刀齋自筆の伝書と伝来の瓶割(かまわり)刀を伝授されたので一刀正伝無刀流と稱した。

○二天一流(にてんいちりゅう)

慶長年間に宮本武蔵が案出した剣法で、その著五輪書のはじめに兵法の道「二天一流」と号しと書いてある一方他の箇所では、この一流二刀と名ずくることといふ見出して武士は得卒ともに二刀を腰につける役である。この二つの利を知らし

めるため「二刀一流」というといっている。また、五輪書を書く前に同書の骨子となつてゐる兵法三十五箇条を書いてゐるが、その中では兵法「二刀の一流」といつている。武蔵は小さい頃父の無二齋に十手の術を教つたほかは師に就かず独学で達人となつた剣の天才である。五輪書に詳記してゐる自己の体験に基づき、独特の剣法論は合理性に富み現代剣道にとつても大変参考になる内容を含んでゐる。当時の他の流派の剣法書が抽象的神がかり的禪的説明に終始してゐて実技は師の口伝にまつほかないのに比べてどんなに科学的であり、進歩的であることかまことに驚嘆に値する。二天一流の名称由来については自記してゐないから、武蔵が晩年二天と号した(確証なし)のちなんで名づけたなどという説があつたりするが、二天とは天上に輝く日月の意味があるところから、大小二刀(の構え)を日月にたとえていつたのではないかと思ふ。また、別名円明(えんみょう)流ともいふが、これは、彼が若い頃播州明石(兵庫県内)藩の客臣であつた頃、謡曲の源氏供養に「生死流浪の須磨の浦を出でて四智円明(妙)の明石の浦にみおつくし」とあるのちなんで称したという。武蔵の死後養子の伊織が小倉に建てた碑

文に「新免武蔵藤原玄信二天道楽居士の碑」と題し、「時に自ら於天仰実相円満之兵法、逝去不絶の字を書し、言をもつて遺像となす」とあることから、円の理(二刀を合して円形に組む太刀の遺い方)を明らかにする剣法という意味ではなからうか。武蔵流、二刀流、二天流、二天政名流、政名二刀流など後世多数の異名が用いられてゐる。

○タイ捨(しゃ)流

大捨流、体捨流とも書くが、正統の伝書には新影タイ捨流が用いられてゐるといふ。肥後人吉(熊本県内)の丸目藏人を流祖としてゐる。丸目は新当流をト伝に習ひ、後に上泉と立合つたをとがめ、どう袋竹刀」を取り出したのをとがめ、どうして木剣で立ち合はぬのかというのに答えて、上泉は木剣ではどちらかが傷つく、兵法は徒らに人を傷害するたためのもではないといふ三番勝負をして三番とも丸目が負けた。丸目は即座に入門をこうて新陰流を修得し、帰国の後門人を取り立てたが、再び京に上つて上泉をたずねたところすでに死去してゐた。丸目は上泉から神妙剣などの奥秘の太刀を伝授される機会をなくしたことを残念に思ひ、これ以後大捨流を称するに至つたという右左

に眺びちがえ縦横になき立てる戰場向きであることから、タイ捨とは体捨すなわち捨て身の意味ではなからうか。右けさ、左けさげに木剣を鋭く振り稽古を主眼とする示現流が、タイ捨流の流れをくんでゐることからも推察されるがどうであろうか。

○示現流(じげんりゅう)

島津藩士東郷藤兵衛重位を流祖とする薩摩の御家流で藩公の特命で藩士の必修とされ、幕末には藩主斉興の命で「御流儀示現流」と呼ぶようになった。人斬り(中村)半次郎後の桐野利秋や寺田屋事案によつて天下に勇名をとどろかした。

東郷は神道流から分派した天真正自顕流の末流善吉和尚に奥伝をうけて帰国し、慶長二年藩の師範役となつた。彼は和尚につく以前に丸目藏人の高弟からタイ捨流を学んでゐたという。藩主島津家久は法華経の示現神通力の語からとつたものであるといわれている。

○直心影流(じきしんかげりゅう)

元祿の頃心影流六世高橋弾正左衛門重治が同流の形が乱れて来たのを正して直心正統流と称したが、その高弟の山田平左衛門光徳一風齋が七代を継ぐに及んで陰(影)流の古名が失われてしまつたのを直心直心影流と改名した。正しい心影流

という意味であろう。同流の稽古法定に「直(なほ)し(太刀の扱ひ方を是正すること)の義相弟子の内に一切直し申されまじく、この義は固く守るべき事」とあって彼以後形の大巾な改正はなされず伝来されてきた由。講武所頭取男谷信友が同流に光輝を添え、その高弟神原健吉その弟子山田次明吉との伝されている。

○心形刀流(しんぎょうとりう)

しんけいとりうとも呼ばれる流派で伊庭(いば)是水軒秀明、常吟子が、柳生流、後に神道流を学んで天和二年(一六八二)独立して称したものである。秀明が師の志賀十郎兵衛如見齋から伝えられた目録の末に「三陰三陽本末之間、數量形刀雖有之当流之極意者本心形刀而已」とあるのによつて流名とした。秀明の口伝に心形刀は一致の動きをしなければならぬと教えている。今流にいえば心気力の一致と心気剣体の一致を強調したものであろう。この流では片手上段を得意とする由。幕末上野彰義隊の一隊長伊庭八郎が左手を切り落とされながらも右手で敵を倒し、奮戦したの有名な話である。また、大名剣士として有名な肥前平戸(長崎県内)の杉浦静山、常静子は同流の達人として異名を放っている。

○神道無念流(しんとりうわねんりう)

元禄、享保の頃下野国都賀郡(群馬県内)の福井兵衛門嘉平が一円流を同国の田中権内に学んだ後諸国を修業して廻つたが得心するに至らず信州の飯綱権現に参りうすること五十日にして、夢に劍の妙理を悟つた。神に折つて無念の流といふのである。江戸に出て四谷に道場を開き多数の門弟に教授した。この流で有名なのは、幕末三劍客の一人齋藤九郎である。齋藤の練兵館道場に掲げた神道無念流演劍場壁書に「天下のため文武を用ふるは、治亂に備うるなり」「兵は凶器といへば、その身一生用うることなきは大幸といへし」など七条を列記して学者の戒めを説いた。昭和の劍聖故中山博道範士は、当流の代表者として劍聖小野派一刀流の故高野佐三郎範士と好一對であつた。

○鏡新明智流(きやうしんめいち)

桃井(もものい)八郎左衛門直由が、安永二年(一七七三)日本橋南茅場町に土学館道場を開いて鏡新明智流と称した。直由は大和郡山の柳沢の家臣で浪人後諸国を遍歴し、無辺流の槍術、戸田、一乃柳生、堀内の諸流を修めて、これらを総合して一流を編み出したものである。新心を心とも書き、智を知とも書く。鏡に物が写つるがごとく敵を明らかに知ること

を主意としたのか。心を鏡にして明智を新たにするという意味か。幕末三劍士の一人四代目桃井春蔵直正は講武所教授方となり、「位は桃井」と評判をとつた名劍士であつた。この評語からも流名の由来がうかがえるように思われるがどうであるうか。また、春蔵が竹刀をいかにも軽そうに使うからどんな竹刀かと手に取つて見たら大層重かつたという。理に合せて使えば重くても楽に遣えるものである。力で遣う間はダメだといつたことである。今日でも上手は重い竹刀を軽く、軽い竹刀を重く遣うといわれている。

○柳剛流(りうごうりう)

岡田総右衛門奇良が文化の頃心形刀流を二代伊庭軍兵衛直康に学んで脚を打つ得意技を発明して称したもので、柔よく剛を制す、柳に雪折れなしという心をあらわしたものと云う。枝垂れ柳が春風に吹かれて無心に地を払うのにヒントを得たのではなからうか。佐々木小次郎の燕返しの故事を連想させる。

○雖井蛙流(せいありりう)

鳥取藩深尾角馬重義を流祖とする。深尾は寛永八年(一六三三)の生れて、人並みより小男でやせつた男であつたが、父について丹石流を学んだけれども同流が、

太刀数が多く、その上具足劍術（介者劍術）で荒々しく小男非力な者に過ぎないかれは、諸流を勘案して素肌劍術に改め、自分の号の井蛙をとって流名とし、すらすらと柔らかに遣うようにしたという。鳥取藩で広く行われていたが、重義が切腹して果てた後は振わなくなつたことである。雖の字を冠しない書き方もあり、この字を冠しても読み方は省くならわしてある。井の中の蛙（小男非力の者）であつても劍の道においては他に劣らないとの気概をこめたものではなからうか。

○劍道

寛水の頃安部五郎太夫頼任という者が、タイ捨流から出て円伝流と称し、さらに円流と改めて後に流名を廃して劍道といつた。劍道という語が用いられたのはじめである。ただし、今は通名となつている「劍道」という語は、明治末期から大正にかけて従来の劍術、擊劍に代つて用いられたのはじめ大正初年制定の「大日本帝國劍道形」に正式呼称として使用されたが、法規上正式に使われたのは大正十五年五月二十七日学校体操教授要目が改正されたときである。

最後に流儀の名前のつけ方について総括すると、第一に流祖の姓名あるいは号をもつてする

もの、例えば中兵衛助長秀の中兵衛流、辻無外月丹の無外流、浅山一伝流など。第二に地名や地方名をとつたもの、例えば唐島流、香取流、京鞍馬流など。第三に流祖が神示をうけたものによるもの、例えば正伝神道流、新当流など。第四に流儀の主意をあらわしたものの、例えば念無刀流、心形刀流、鏡新明智流などである。また、源流から分派して改名したり、同じ系統でありながら別の呼称をもつてするものがあつて流名が混乱し、その由来が不明になつていゝものが大変多い。たとえば、新陰流のごとき新影、神影、神流、真流、真影、心影、心陰など同音異字が用いられている。

以上劍道の流名を時代を追つて略述してきたが、現代劍道に深いつながりをもつた事柄を併記して本稿の結びとする。

戦国時代の争乱が、織田豊臣から徳川家康の時代に終末していわゆる弓は袋に槍はなげしの元和偃武以降幕末まで大平の時代が続いた。それにとまなつて武道具も変化し弓馬柔劍槍などがそれぞれ分化して専門化すると至つたが劍道においても介者劍道から素肌劍道と変容して行つたのも自然の成り行きであらう。その変り目に上泉信綱のごとき天才があらわれて袋竹刀の発明をした時代の要請にたえ劍道銀襪に一大革新をもたらし、また、時代が降つて正徳の頃（一七二三頃）直心影流の長沼左衛門國郷が面小手形の防具を完成して実戦同様の稽古を可能ならしめ、

大変な好評を得て門下一万余に及んだという。初めのうちはこれをしていゝ流派も、これを着

用しての試合劍術をずんばれば門弟が来なくなつてしまふので一時に流行するようになつた。その後江戸時代末期に至つて千葉周作があらわして竹刀稽古を主として、その体系化をはかつた。劍術修行心得を発表して段階の合理的な学習法を説くとともに劍術を小手業などに分類解説して劍術六十八手とし、中には今は用いられなくなつた業もあるが、現代劍道教科書に記載されている業を網羅していてその進歩の思ひが驚嘆に値する。また、各流を統一する試みとして水戸の徳川斉昭による水府流の創始があることも見のがすべきではなからう。これは一刀流と新陰流とを合流したものである。その後明治になつて警視行が各流の名人を招いて師範とする一方いわゆる警視行流なるものを創出し、ほゞなく大日本武徳会の発足を見て劍道形の制定がなれることもに準次武徳会流すなわち現代劍道が普及するに至つた。現代劍道の劍士の中にも時によつては古流を名のる者もあるが、それは伝統の保持を明らかにするもののごとくである。

（参考資料）

- 一、武術叢書
- 二、日本劍道史 山田次朗吉著
- 三、日本武道史 横山健堂著
- 四、皇國劍道史（小沢愛次郎著）
- 五、日本劍道史 堀正平著
- 六、肥後武道史
- 七、劍道の発達（下川湖著）
- 八、武芸流派辞典（滝合吾著）
- 九、劍道五百年史（富水堅吾著）
- 十、明治武道史（渡辺一郎編）
- 十一、警視行武道九十年史
- 十二、劍道五十年史
- （庄子宗光著）その他